

二一〇番

うつせみと 思ひし時に 取り持ちて 我が二人
見し 走り出の 堤に立てる 槻の木のごち
ごちの枝の 春の葉の しげきがごとく 思へり
し 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど
世の中を 背きしえねば かぎろひの もゆる荒
野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ち
いまして 入り日なす 隠りにしかば 我妹子が
形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取
り与ふる ものしなければ 男じもの わきば
さみ持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づく
つま屋のうちに 昼はも うらさび暮らし 夜は
も 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに
恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山
に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言へば 岩
根さくみて なづみ来し 良けくもそなき うつ
せみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも
見えなく思へば